OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ともに綴る言葉
Author(s)	辻, 明典
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 189-196
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68191
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ともに綴る言葉

辻 明典

きっと誰もが幼い頃、周りの大人たちから「〜ちゃん」と呼びかけられた経験があるのではないだろうか？ ときには、街角で呼びかけられて。ときには、甘い声色で。また、次第に大人という立場へと変わるにつれて、年端もいかぬ子の面倒を見るにあたり、親しみを込めて「〜ちゃん」と、語りかけたこともあるかもしれない。

ところで、この拙稿を読まれている方々は、自分自身が周りの大人たちから「幼い子ども」としてみなされていたのは、幾つまでだろうか？ 背丈も伸び、言葉遣いも少しずつ大人びてくるにつれて、周りの大人たちの、例えば町内の小さなお祭りをはじめとした年中行事の役目を求めるなど年齢相応の態度を以て接してくる機会は増えなかっただろうか？

また、読者の方々なら、どの様な人を「幼い子ども」と看做すだろうか？ 幼稚園や保育園に通っている頃までだろうか？ 小学校低学年までだろうか？

よくよく考えてみると、中学生や高校生に対して、よほど幼少から親しい間柄でなければ、「〜ちゃん」という接尾辞を伴って、声をかけることはあまりないような気がする。まして、成人を迎えた方々に対して、「〜ちゃん」と呼びかけることなど、よほどの関係でなければなさそうだ。

しかしながら、生まれながらに重度の障がいのある方々、特に発話に困難を抱える方々に対して、「〜ちゃん」と呼びかける人たちは、かなりの数にのぼる気がする。

例えば３０歳、４０歳を過ぎた、重度の障がいのある方々に対する、甘い声色、そして「〜ちゃん」という呼びかけは、目の前のその人が、まるで就学前の子どものように幼く、周囲で起こっている出来事をよくわかっていないと看做す、メッセージそのものだ（断

っておくが、私は幼い人たちを、何も理解していない存在だと言うつもりはない。むしろ、幼い人たちほど、物事を深く考えている人たちだと思っている)。

ところで、「幼さ」って何だろうか？
何らかの「基準」が設定されていて、そこに達していないと「幼い」とみなされるのだろうか？「基準」の一つに、「一人でできる」ということがあるかもしれない。でも一人でできなければ、いつまでたっても「幼い」ままなのだろうか？
身体が不自由でも、誰かの助けを借りて好きな服を選んで着られれば、暮らしはもっと楽しくなると思う。でも例えば特別支援学校では、長い時間をかけても、服を着替えたり、ボタンをはめたり、紐を結んだり、手を洗ったりすることが、一人でできると称賛されることが、とても多い。

私には、ここのところ訝しんでいることがある。障がいのある方々、特に発話に困難を抱えている方々について、例え身体が成長しても、内面は成長しないとみなし、周囲で起こっていることはあまりよく理解していないと捉えようとする傾向を、私たちはもっているのではないか。そう感じているのだ。

だから当人を前にして、こちらの言っていることは理解していないだろうと決めつけて、「どうせこの人は、○○だろう」などと、心ない言葉を平気で口にする人もいる。そして様々な活動は、説明や本人の同意もなしに一方的に、与えるように、行われる。そこに対話はない。
そしてよくあるのは、「試す」質問だ。まるで試験を課すかのような、「この人の名前は？」「今日の天気は？」といった、一つの正解を導くかのようなやりとり。しかし、よくよく考えてみると、人を試すようなやり取りは、日常生活のなかには、あまりみられない。

試された側からすれば、いい気分はしないと思う。なぜならば、人を試すような質問は、私はあなたのことを疑っています、周りのことをあまり理解していないと思っています、といったメッセージにもなりうるからだ。「本当にあなたは、わかっているのかな？」「これくらいのことなら、わかるかな？」と。

重い障害があり、発話に困難を抱えている方々は、本当に周りの出来事をまったく理解していないのだろうか？　仮に話すことが難しくとも、精神的にも成長を続けてはいないのだろうか？　内面では言葉を操り、何かを感じ、何かを考えてはいないだろうか？　発話は難しくとも、本当は言葉を理解しているのではないだろうか？

ここでは、私が経験した、重い障がいがある方々との交流の、ほんの小さな一端を、記述してみたいと思う。一緒に手を添えて言葉を綴る[1]という、ほんの小さな経験だ。この経験を記述することから、言葉が現れることついて、考えてみたい。

ともに綴る。そして、言葉が現れる。

障がいがあろうと、なかろうと、その人は、その人。目の前にいる人が、一人の人間であることに、何ら変わりはないはず。その人に対して、節度を以て接することは、大切なことであるはず。

盲、聾、肢体不自由、病弱、知的障害…といった、制度化された障がいとのみ、向き合っているのではない（例えば特別支援学校は、理念としては一人一人に個別的なニーズと向き合うことがうたわれているが、制度としては、盲学校、聾学校、養護学校といったよう

[1] 身体の一部に軽く触れることで、独力では実現できない動作の達成を支援する援助は Soft Touching Assistance（STA）と呼ばれ、書字のみならず日常動作にも応用可能とされる。詳しくは、以下の資料を参照。『子どもと知り合うためのガイドブック：ことばを超えてかかわるために〈特に身体運動に重度の障害がある人への支援〉』笹本健（2010）、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

に、障がいごとに学校が分けられている。でも注意していただきたいのだが、病や、困ったことを抱えて生きていることを、否定しているわけではない。障がいがある方々が抱える、様々な病や、苦労や困難に様々な支援をすること、それは必要なことだと思っている)。あくまでも、一人の実存と向き合っているのだ。

だから私は、たとえ身体がうまく動かせない人であっても、簡単には相手の身体には触れない（緊急時は、もちろん別！)。触れるときは必ず、これからどの様な活動をするのか、そしてどうしてあなたに触れるのかを、説明する。

例えば、一緒に文字や文章を綴るときも、そうだ。

思い通りに、自分の手を動かせない方がいる。一人では、ほんの僅かしか手を動かせない方もいる。意志に反して、文脈の抜け落ちた言葉が口から漏れてしまう方もいる。身体が勝手に動いてしまう方もいる。

そのような方々に私は、一緒に文章を綴ることを提案する。ただ提案をするのではない。語りかけながら、提案をするのだ。相手は周りのことをよく理解しているのだという信念をもって。それは、どんなに重い障がいがあろうとも、目の前の人は周りの出来事をよく理解しているし、内面に言葉を宿しているはずだ、という信念だ。発話が難しく、思い通りに身体が動かないのかもしれない。でも交流のなかで、その人の言葉は現れる。

ある日その人は、自分の席に座っていた。私はその人が座っている椅子と、同じ高さの椅子をもってきて、その人の前に座る。そして、「〇〇さん」と声をかける。その人は、私の呼びかけに応じてくれた。俯いていた顔をすっと上げて、私の方を見た。そして私は、自分の胸を指差して、こう語りかけた。

「〇〇さん、僕はこんなことを考えているんだ」
　顔を上げてはいたけれど、一見すると、表情に乏しいような気もする。もしかしたら他の人が見れば、無表情とらえるかもしれない。でも、私はそう感じなかった。呼びかけに応じて顔を上げたとき、「なんでしょうか？」と言いたげな目で、私を見つめたのだ。その人の目には、小さな力がこもっていた。
「誰もが、心のなかに言葉を持っているんだ。君も、もちろん、僕も。」
　そう語りかけるとその人は、目を「きらっ」と輝かせて、いつもは合わせることの難しい視線を私に送り、いつもよりも声の調子をあげて「心」とつぶやき、自身の胸を指差した。
「そう、心だよ。心のなかの言葉。」
　私はそういいながら、また自分の胸を指差した。その人も私と同じように、しかし私よりも大きく腕を動かして、自身の胸を繰り返し指差した。我ながら、青臭いことを語っていると重い、ほんの少しだけ恥ずかしい気持ちになった。でも直交的な語りかけに応答しながら、私の目前のその人は、徐々に他者へとひらかれていく。
「だけどうまく心のなかの言葉を、うまく口にできないこともあるんだ。僕だって、人前に立って緊張した時や、考えがまとまらない時は、うまく話せないことがある。もしかしたら君も、思っていることがうまく喋れないことがあるんじゃないかな？」
　すると今度は、少しだけ身体を乗り出して、嬉しそうな、活き活きとした表情を見せた。私に何かを伝えようとする雰囲気を醸しだしている。

「うまく喋れなくても、気持ちを文章で表せる人もいるんだよ。一緒に、書いてみないかい？」
　私はそう尋ねながらフェルトペンと紙（フェルトペンは、鉛筆やボールペンと比べると小さな力で、インクを紙につけることができる）を見せる。すると、その人は右手の甲をすっとあげて、視線を

少しだけ斜め下に向けた。視線と一緒に、上体も少し斜め下を向きはじめる。これから机上で執筆する準備をしようと、視線、上体、右手を調和的に動かそうとしている行為そのものが、「ともに言葉を綴る」という意思を表出しようとしている。その人にとって困難な発話ではなく、身体表現による表出だ。

その一連の動きから、私は「その人の同意」を感じとった。私はその人の右手の動きに合わせて、すっと流れるようにフェルトペンを持っていく。そしてその人の右手の甲を包み込むように、私は手を添える。そして机上に紙をすっと置く。

このようにして、ともに文字を綴る活動が始まる。いまは紙にフェルトペンで綴っている。でも指先で私の掌の上に綴ることもある。また、一緒に文字盤を指差すこともある。いずれにせよその人の動きを、触れている私の掌を通して感じとる。一緒にもったペン。添えた掌。指の動き。微細かつ繊細な動きから伝わってくる、その人の意思を感じとる。

注意していることがある。手を添えている私が、リードしてはいけない。あくまでも、その人が綴ろうとする動き、文字を指差そうとする動きに敬意を払うのだ。

「好きな季節は何ですか？　僕は、春が好きだよ。暖かくて、過ごしやすいからね。君は？」

その人の手が動く。お、なるほど。そうきたか。一緒に文字を綴っていると、文字の書き順が、私とその人とでは違うことがよくわかる。私とその人との差異が、掌から感じとられる動きを通して経験されたとき、その人の表現が際立つ。その人の動きを尊重して、一つ一つの文字を、ともに綴っていく。私の身体は感じるものであると同時に、感じられるもののようだ。私はその人の手に触れながら、その人から触れられていると感じている。これがメルロ=ポンティの言っていた、「反転可能性」なのかもしれない。

腕が大きく動いてしまうことがある。でも決して、力を入れて抑え込んではいけない。殴り書きになろうとする力を整えつつ、文字を綴っていく。抑えるのではなくて、整えるのだ。その人は、一人で文字を描こうとすると、手首だけではなく、腕全体が大きく動いてしまう。その動きを、私はつつみこんだ掌で受け止める。そして次第に、触れる／触れられる掌、触れる／触れられる手の甲を介しての、対話が始まる。大丈夫。安心して書いていいよ。大きく動いてしまっても、受け止めてあげるから。口にはしないけれど、私は掌を通して相手の動きを受け止めて、私自身の意思を伝える。それを察したのか、その人は大きくなろうとする動きを一旦止めて、次の文字を書こうとする。

水を打ったような静寂につつまれる。私は掌から伝わるその人の動きに、意識を集中している。きっとその人も集中して、包み込むように触れられている手の甲から、私の意思を感じているのだろう。無言の対話だ。まるで森のなかを歩いているかのように、とても静かだ。

「すきなきせつは、ふゆです。」

ともに、ゆっくりと、綴った文章だ。言葉を持たないと、内面は幼いままだと、思われていた人が綴った文章だ。でも障がいがあろうとなかろうと、目の前の人と、一つの実存として接しようとする交流のなかで、紙上に、掌上に、言葉が表れることもある。一緒に持ったペンや、手を添えた指先を通して、その人の言葉が、掌や、紙や、文字盤の上に、広がっていく。

さっきのやり取りの続きだ。

「どうして、冬が好きなの？」
「ふゆがすきなのは、ふゆだからです。」

「君は、まるで詩人だね。」
　驚きと喜びが混じったような、声色が出る。
　その人は、重い障がいがあり、話すことに困難を抱えている。だけどある日、長田弘の詩集を貸すと、食い入るような目つきで読みはじめた。

ことばって、何だと思う？
けっしてことばにできない思いが、
ここにあると指すのが、ことばだ。
（『花を持って、会いにゆく』より　長田弘）

（つじあきのり）